

中

(十五)

大

里

白雲

菩

介

の巻

薩

山

時代小説文庫

峠

時代小説文庫 15

大菩薩峠 (十五) 白雲の巻 全二十冊

昭和五十七年五月二十日 初版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 旭印刷 製本所 本間製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600115-7440(0)



時代小説文庫

15



富士見書房

八菩薩峠

(十五)

白雲の巻 中里介山

目次

不破の関の巻(つづき)

七

白雲の巻

三八

ゼロとしての机龍之助

折原脩三
四〇五

大菩薩峠

(十五)

白雲の巻

不破の関の巻（つづき）

四

中仙道を近江から美濃へ越すところに、今須駅というのがある。

関ヶ原へ一里、柏原^{かしわばら}へ一里というところ、なお委^{くわ}しく言えば、江戸へ百十三里十六町、京へ二十里六丁というほどの地点に、今須駅というのがあるのです。

不破の中山とか、伊増^{いまさ}の明神とかいって、古来相当にうたわれないところではなかったけれど、番場^{ばんば}、醒ヶ井^{さめい}、柏原——不破の関屋は荒れ果てて、という王朝時代の優雅な駅路の数には、今須駅なんていうのは存在を認められなかったようなものの、でも、ここがまさしく美濃と近江との国境になるという意味のみからではなく、王朝時代から、ここに寝物語、車返しの里なんていう名所が、心ある旅人に忘れられない印象を与えるところのものになっておりました。

寝物語の里というのは、一筋の小溝を隔てて、隣り合った一軒は近江に属し、一軒は美濃に属して、国籍を異にした二軒の家の者が、寝ながら物語りが出来たという風流の呼び名とはなっている。試みにその由来を「両国屋」という宿屋で尋ねてみると、次のような一枚の絵入りの刷り

物をくれる。

一、此所を寝物語と申すは江濃軒相隣り、壁を隔てて互に物語をすれば、其詞相通じ問答自由なるゆゑなり。むかし源義経卿、東へくだりたまひしとき、江田源藏広成といひし人、御後をしたひ奥へ下らんとして、此所に一宿し、此屋の主と夜もすがら物語りせしうち、不斗其姓名をなほ、隣国の家に泊り合はせし人これを聞、扱は江田源藏殿なるか、我こそ義経卿の御情を受けし静と申すもの也、君の御後をしたひ、是まで来たりしが、附添ひし侍は道にて敵の為にうたれぬ、我も覚悟を極め懐剣に手をかけしが、いやいや何とぞして命のうちに、今一度君にまみえ奉らんと虎口の難をのがれ、漸くこれまで来たりしなり、おもひもよらず隣家にて其方のねものがたりを聞くうれしさ、これ偏に仏神のお引合はせならん、此うへは我をも伴ひ給はれと有ければ、源藏聞て扱は静御前にてましますか、此程のおんものおもひおしはかり御いたはし、此上は御心安かれ、是より御供仕らんと夜もすがら壁を隔てて物語りし、翌日此所を御たちありしよりこのかた、此所を美濃と近江の国境寝物がたり、とは申伝るなり、其のちも度々、ねものがたりの叢記名所たるにより上聞に達し、辱くも御上より御恵被成下置不易の蹤蹟たり

江濃兩國境寝物語

両国屋

とある、これは、あんまりあてにならない。静御前によって寝物語の里が生まれたというより、誰かが呼び名した寝物語の里の名があつて、静御前のいわれが付会されたと見るが至当でしょう。それはそれとして、もう一つ、それに付け加えて、たれがいつの頃、因縁をつけたのか、ここ

へ来た旅人が、わざわざ宿を替えて泊ってみるということなんでもありました。

それは、上方から東へ下るほどの人に「行きかう人に近江路や」は悪くないとしても、これから「いつかわが身のおわりなる」という辻占つじうらがよろしくないというわけです。

尾張、美濃から出て近江に足を踏み入れる分には、何のことはないが、さて、これから近江路を、みのおわりへ出るといふ旅人してみると、何かしら人生の旅路のたよりなさというものが、識しんをなすような気持ちに駆られるのも、人情無理のないところがありました。そこで、一旦美濃路へ入った人が、また改めてわざわざ近江の国へ逆戻りをして、足を踏み直すというようなことをする、そのおまじないのためには、この寝物語の里が詠あやえ向きの地点になっていました。

今日のような科学の粋の時代においてすら、地球上の暦数の都合上、海上のある地点では一日を二つこしらえて、そこを行きつ戻りつするようなことにおいて三百六十五日を調節するところさえある。

その頃美濃と近江との境で、ちょっとこんな地理的遊戯を試みて、行き越し旅の幸先さいさきを祝うということも、ありそうなことで、無からしめるほどの必要もなかったものでしょう。

今晚、この寝物語の里の近江領に属する家へ、机龍之助が泊りました。

それと例の小溝一筋を隔てた一方の美濃路に属するほうの家へは、代官の淫婦いんぶお蘭らんさんが泊りました。

泊るならば、わざわざこうやって、二軒に別れて泊らずともことだが、それを、わざわざ別れて泊ったのは、土地の来歴を知るお蘭さんという女のワザとした振舞で、同じ泊るならば一つ

家へ泊るよりも、こう分れて泊って、国境で寝物語の趣味を味わってみることも一興としてしたことであるか、或はまた、この種の女の習いで、迷信が存外深く、何ぞこの度の旅の縁起をかついで、為にわざわざ手分けをして泊るように仕組んでしまったものか、その辺はよくわからないが、いずれとしても、人間同志はあんまりくつつき、引つつきしているものよりは、少し離れたほうが情味があるものに相違ない。

全身の豊満な肉体を露出するよりは、うすもの薄物を纏うた姿にかえって情調をそそられるといったような心理もないではない。

お蘭さんの計らいで、今晚は離れて泊ってみましょうよ、国を一つ離れてね、夏だと一層ようござんしたねえ、今は寝物語の夜もすがら、はととぎす杜鵑を聞いて明かすというわけにもいきませんから、虫の音でもしんみりと聞きながら——なんぞとくると、この女も相当に憎らしい奴に相違ないが、これはそういう風流気はさて置き、一種のアブノーマルな性慾心理のさせる張りきった余技か、そうでなければ、子供にも笑われる迷信が、おのずから風流の道と一脈相通じたというまでのことでしょう。

「ねえ、あなた、近江のお方……御機嫌はいかが」
やど宿を別つとともに、お蘭は蒲団の上に横になって、くるりとこちらを向いて、龍之助に呼びかけました。

てな事でこの女は、無性にいい気持になっている。この女は自分が美濃の国にいて、相手を近江の国へ置いて寝物語をするというだけの興味でいい気持になり、まだ宵の口なのに早くも夜具

をしつらえ、行燈あんどんを細目にし、帯を解いて寝巻に着替えて、横になってクルリと向き直って、隣りの家の障子越しに呼びかけてみたものです。

女が、はしゃいでいるのに、男は返事をしないが、これも多分、同じように宵の口を夜具の上に寝そべっているの応待に違いない。

「ねえ、あなた、乙おつじゃなくって……」

と言ったような甘ったるいもので、女はやや蒲団の上で、なめくじのように溶け出して、手に負えない。

さて、もう、ここまで来さえすれば、追うにしても、追われるにしても安心、美濃から追われれば近江へ、近江から追われれば美濃へ――

こうして女も甘ったるいものだが、男のほうもかなり甘ったるく出来ている。飛驒の国越えをして美濃の太田へ落着いた晩、この女も今晚のうちに殺してしまわなければならぬ女だ――と幾分の凄味すしみを見せたはずなのに、ずるずるべったりここにここまで牛に引かれて来てしまつて、寝物語うんぬん云々のいちやつきにお相手をつとめている。

「ねえ、あなた、本当に乙じゃありません？ 寝物語の里なんて、名前からしてよく出来ていますねえ、そこで今晚は寝かしませんよ、今晚こそ、よっぴておのろけを伺いたいもんでございまずね、寝物語の里で、いびきの声なんぞは艶消つやしでございますからねえ、寝ようとなさつても、寝かすことじゃございませんよ」

美濃の国の女は、こう言つてまたひとり、いちやつき、いちやついて、甘ったるい自己陶醉が

いよいよ溶け出してくる。

近江の人は、それに返事をしないこと以前のとおりだが、

「こんな晩、ほととぎすが聞きたいわ」

とか何とか、どちらかの口から一言洩れると、御兩人もまだ話せるのだが、女は自己陶醉から醺酔するべちゃくちやの外には何の初音ももらさない。男はうんがの声を上げないで寝そべっているだけのものらしい。

「ねえ、あなた、おのろけを伺おうじゃありませんか、ちょいと、近江のお方……」
「いよいよじゃじゃけて手がつけられない。」

「女殺し……」

と女が突然に言いました。無論絶叫ではありません。

「女殺し……あなたという人は今まで幾人の女を殺しました、さあ、今晚の寝物語に、その懺悔話を聞こうじゃありませんか、ぜひ……白状しないと殺すよ」

肉感的に圧迫するような声です。

「ようよう、あなた、おのろけを聞かして頂戴よ……今までの罪ほろぼしに、よう」

両国の宿屋では軒を隔てて、こんなもだもだの宵の口——車返しへ通ずる表街道は、こんなものではありませんでした。

この寝物語の里の前で、ちよっと杖をとどめた、美濃近江路を通り合わせの二人の旅人が、
「よい月でございますなあ」

「ほんとうによい月でございます」

「惜しいことでした、実は柏原かしわばらからわざわざ疲れた足を引きずって、この寝物語の里を目ざしてまいりましたのが、今晚、ここでゆっくり寝物語を伺いたいと風流が仇あだになりました、もう現に先口せんぐちのお客があつて、寝物語の座敷が約束済みとのことでしたがかりいたしました」

「是非に及びません、関ヶ原まで伸のそうではございせんか、荒れてなかなかやさしきは不破ふわの関屋せきやの板廂いたびさし——このとおりいいお月夜でございますから、かえって、この良夜を寝物語に明かそうより、明月めいげつや藪やぶも畠はたけも不破の関——といった風流に恵まれようではございせんか」

「それは一段でございます、では、これより不破の関を目指して宿やどを急ぐことといたしましう」

「まだ宵の口でございますから、あえて急ぐ必要もございすまい、関ヶ原までは僅わずか一里の道、それもこの良夜を、得手に帆を揚げたような下り坂でございますから」

こう言つて、夜道を緩々と東の方へ立ち去る両箇ふたりの旅人があるのを以て見れば、外は、やっばり詔みことえ向きのいい月夜に相違ない。

この声高こゝろな、表街道の風流人の会話に、しばし聞き耳を立てていた美濃の女が、それより、月ともほととぎすとも言うもののないのに業わざを煮やし、

「ようよう、あなた、じれったいわねえ、今晚は天下の寝物語を二人だけで借りつきりなのよ、誰にはばかることはないから、おのろけを、たっぷり伺いましょう、夜の明けるまで……ようよう、じれったいわねえ、白状なさいよう」

柏原の駅で泊るべき予定を、わざわざこの良夜のために、寝物語の里まで伸して、そこで風流を気取ろうとして来てみた二人の被布を着た風流客は、意外にも、たのみきって来た風流寝物語の里は仇し先客に占められてしまった溢れの身を、せん方なく、もう一里伸して不破の古関で月を眺めることによって、一段の風流を加えようという気になって、得手に帆を揚げるような下り坂の道を、車返しでも踵をめぐらすことをせず、悠々として月の夜道をたどりました。

この二人は、どうやら俳諧師といったような風流人であるらしいが、それは二人共に被布を着ているからそれで俳諧師という見立てではなく、また俳諧によって点取り生活をしている営業の人という意味でもなく、正風とか、檀林とかいうまでもなく、一種の俳諧味を多量に持った道づれの旅人と見ればそれでよろしい。

「あれが胆吹山でげしう、胆吹山でないまでも、胆吹の山つづきには相違ござるまいテ」

「してみると、こちら、それが例の金吾中納言の松尾山……」

「これを松尾山と見れば、あれと連がる雲煙の間のが、たしかに毛利の南宮山でなければなるまいものじゃテ」

悠々閑々たる月の夜道で、二人は行く手の山の品さだめをしました。

彼らはほぼ歴史上の知識が教えるところによって、山を断定しているものに過ぎないので、まだこの関路の峽では、胆吹も、松尾も、南宮山も見えないと見るが正しい、しかし、それらの山

の方角を指し、裳もそをとらえたと見れば当らずといえども遠からぬものがある。

二人が目ざす不破の古関のところまでは、ホンの一息のところまで来ている。

「秋風あきかぜや藪も畠も不破の関……」

一人が口ずさんで杖をとどめた時に、もう一人が、

「おや……」

「これは例の妙応寺でござろう、青坂山、曹洞宗、西美濃の惣録そうろく——開山は道元禅師の二世が山和尚、今須の城主、長江八郎左衛門重景の母、菩提の為に建立こんりゅう——今、伏見の宮の御祈願所」

もう一人の風流人が、左の方に、とある大寺の門をのぞんで、

「おや……」

と不審がつて杖をとどめた一方の同行に向かって註釈を試むると、杖をとどめたのが、身の毛をよだてて首を左右に振り、

「そのことではござらぬ、たった今この門前に、彷徨さまようていた物影が見えない」

「はて」

「白衣びやくえを着て、たしかに大小刀を帯して、面おもては覆面していたが、もうその姿が見えぬ」

「はて」

とどめた杖が震え、その杖によって支えられた足が戦慄おののしているらしい。

「拙者はそれを見なかった」

一方の言う。